日吉台地下壕保存の会会報

第１０６号

日吉台地下壕保存の会

２０１２年度、第２４回総会　終了
菊池実氏の記念講演も好評

６月２日（土）、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎大会議室において、本年度総会および講演会が約 40 名の参加者をもって行われました。

今回の講演会には、群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員で、戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員の菊池実氏に「戦争遺跡考古学の現状と課題」をテーマに、戦争遺跡をめぐる現状と課題を、これまで関わられてきた中国などでの調査、沖縄の現状、東日本大震災の被災地の状況などを事例として紹介されながら分かりやすく解説いただき、あらためて戦争遺跡保存活動の現状や課題への認識を新たにすることになりました。また、群馬県の本土決戦の研究や空襲の再検討についてもお話いただき、日吉とは違う実例を興味深く伺いました。講演会と総会の間の休憩時間には、あちこちで歓談の輪が広がりました。

総会では、一年間のあゆみとして東日本大震災による地下壕見学中止期間に始まり、戦争遺跡保存全国シンポジウムの開催、聞き取りやガイド養成講座など例年通りの地道な活動が報告されました。「ガイド事例集」の発行や日吉寄宿舎の歴史的建造物への認定など、気がかりだった点が前進したことの多かった１年を振り返り、これからの１年もまた、みんなで楽しく、実り多き１年としたいと思います。

講演会・定期総会式次第

○講演会　１３：００～１５：００

演題：「戦争遺跡考古学の現状と課題 ―戦争遺跡の調査研究そして保存活用―」

講師　菊池　実　氏

（群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員、戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員、本会会員）

目　　次

2012年第24回総会終了	1p
講演会・定期総会式次第	2～3p
資料　記念講演 戦跡考古学の現状と課題（菊池実）	3～6p
報告「戦跡考古学の現状と課題」を聞いて(遠藤美幸)	7p
総会資料　2011 年度活動報告、2011 年度決算ほか	7p～10p
お知らせ　第 16 回戦争遺跡保存全国シンポジウム 三重県鈴鹿大会要項	11p～14p
報告　ガイド養成講座について(石橋星志)	14p
資料　日吉海軍施設の概要(長谷川崇)	14p～15p
資料　海軍が日吉に来るに到った歴史的経緯とその意味(茂呂秀宏)	15p～16p
資料　会の設立と活動について(中沢正子)	16p～17p
連載　地下壕設備アレコレ(その 5)(山田譲)	18p
報告　悲劇を繰り返さないために(吉沢てい子)	19p
お知らせ　マイ歩―夢タウン港北に掲載	20p
活動の記録	20p

〇総会　　１５：１５～１５：４５
　日　時　２０１２年６月２日(土)　　１２時３０分開場
　場　所　慶応義塾大学日吉キャンパス　　来往舎大会議室
　主　催　日吉台地下壕保存の会

総会次第
　１．　開会の辞
　２．　会長挨拶
　３．　議長選出
　４．　議事
　　(1)　2011 年度活動報告
　　(2)　2011 年度会計報告
　　(3)　2011 年度会計監査報告
　　(4)　⑴ ⑵ ⑶ の報告についての質疑応答及び承認
　　(5)　2012 年度　会長・副会長・運営委員・会計監査の選出と承認
　　(6)　2012 年度　活動方針案説明
　　(7)　2012 年度　予算案説明
　　(8)　⑹ ⑺ の活動方針案、予算案の質疑応答及び承認
　５．　その他
　６．　議長解任
　７．　その他連絡事項
　８．　閉会の辞

記念講演資料

戦跡考古学の現状と課題

菊池　実

戦争を語り継ぐためには

- 戦後 67 年を経て戦争体験を持つ世代（1940 年以前の生まれ）は全国民の２割を切った（全国 17%、2010 年国勢調査）。
- かつて日本国民が経験したもっとも大きな戦争体験の風化を防ぎ、そして戦中戦後を含むアジア諸国民の癒しがたい労苦を考えるためー
- 人からモノ（遺跡と遺物）を介在させ人への継承。
- 戦争遺跡の調査研究と保存活用が重要になる。

事実と情報

- 事実は決してそのまま情報にはなりえない。逆に情報は決して事実を完全には伝達できない。必ず、利害関係による捏造や隠蔽が避けられない。

情報伝達のしくみ

事実 ｛ 捏造（虚構）／記憶／忘却／隠蔽（抹殺） → 記憶 語り → 情報化

事実の検証が重要

戦災と震災を伝える－岩手県宮古市－（東日本大震災の事例や状況との比較、省略）

内田百閒（小説家）・昭和 20 年３月３日の日記

- 去る十六日十七日と二十五日との空襲の時、艦載機が来たと記したが、又艦上機とも云う様に考えていたところ艦載機と艦上機とは別物なのだそうである。どっちがどうなのか判然しないが、この間内艦載機と書いたのはその儘にして置く。（『東京焼盡』）
- －7 月 11 日の日記には「敵機動部隊の艦上機の攻撃」
- 高見　順『敗戦日記』、大佛次郎『終戦日記』、山田風太郎『戦中派不戦日記』、海野十三『敗戦日記』などの記載－いずれも艦載機。
- 空母に搭載される航空機を「艦上機」と呼び、他の艦船（戦艦、巡洋艦、水上機母艦、潜水艦等）に搭載される水上機を「艦載機」と称していた。ただし厳密な区別がなされていたわけではなく、本来は艦上機とすべきものを艦載機と表現している場合も多かった。

負の記憶の両義性

- 戦争遺跡がそうであるように、負の記憶、忌まわしい過去を想起させる記憶は、両義性をもつ。
- 忌まわしい思い出は早く忘れ去り、その出来事を想起させるようなものは消し去りたいという心理を生む。－取り壊される
- 忌まわしい思い出だからこそ、それを記録し、保存し、表現したいとする欲求を喚起する。－歴史的な遺産として保存される
- 負の記憶を生み出すようなモノに直面した人々は、保存への意志と忘却への願望との間で揺れ動く。それは個人の中で完結するだけでなく、ときには世論を二分するような論争へと発展することもある。

近代日本の戦争遺跡

1. 幕末・開国頃から第二次世界大戦（アジア太平洋戦争）の終結頃までがその時代の範囲。
2. 戊辰戦争から西南戦争に至る間を除くと、他国の領土での戦争。
   －「大日本帝国」の地域や「大東亜共栄圏」における戦争遺跡－「空間」の組み替えや「時間軸」の延長が必要。
3. 1944 年 6 月の B29 による日本本土への本格的空襲以後、国内も戦場となった。
   －前線と銃後の境界の溶解－
4. 調査研究の対象地域は、アジア太平洋全域に及ぶ。

戦争遺跡の調査研究を考える

- 戦場の考古学－慰霊行為とのはざまで
- 戦場・被災地の考古学－戦争遺跡か軍事遺跡か
- 戦場・被災地の考古学－非埋没資料と埋没資料
- 慰霊の考古学
- 近代化遺産と近代の遺跡調査
- 遺跡の取扱い問題
- 戦争遺跡を調査研究する意義

戦場の考古学

（那覇市真嘉比の遺骨収集－2009 年）
（那覇市真嘉比、西原町の遺骨収集）

戦争遺跡か軍事遺跡か

- 国内の戦場にかかわる遺跡の有無
  －戊辰戦争、西南戦争の遺跡、アジア太平洋戦争末期の遺跡（1944 年 6 月～1945 年 8 月）－敗戦までのわずかな期間に形成される。
- 日清・日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争、アジア太平洋戦争（開戦時から 1944 年前半）の遺跡はない－軍事活動のすべての面の遺跡－軍事遺跡
- 沖縄の戦争遺跡や空襲・戦災跡、地下工場跡の視点の欠落。

戦場・被災地の考古学
－非埋没資料と埋没資料－

・非埋没（地上）資料
建造物（木造・煉瓦造・鉄骨造・鉄筋コンクリート造り）。－建築物、土木構造物（射場・隧道など）、その他の工作物（掩体壕など）－
・埋没（地中・水中）資料
考古学的な遺構・遺物（戦災による消滅、敗戦時における意図的な破壊、関連資料の焼却、地中や水中への処分－証拠隠滅を目的）
水中文化遺産保護条約－2009 年
具体例）意図的破壊－満州第七三一部隊跡
証拠隠滅－神栖・チチハルの毒ガス事故

戦時下の群馬（1944 年～45 年）
① 米軍による県下空襲についての研究
1945 年 2 月－8 月、B29 と艦上機空襲の実像に迫る。
② 本土決戦についての研究
本土決戦部隊の県内移駐、1944～45 年の県下国民学校の様相。

これまでの空襲記述
米軍史料の収集と翻訳・分析　－B29・艦上機・偵察機－
- 作戦任務報告書（B29）
- 空襲損害評価報告書
- 米国海軍・海兵隊艦上機戦闘報告書
- 米国第 311 航空団・第 3 写真偵察戦隊戦闘報告書

日本陸海軍史料の収集と分析
- 陸軍飛行第 10 師団命令綴
- 第 302 海軍航空隊戦時日誌
- 本土防空作戦記録(昭和 25 年)
- 本土地上防空作戦記録(昭和 26 年)
- その他の史料

空母「バンカーヒル」と高崎出身の特攻隊員・小川　清少尉
- 第 84 雷撃飛行隊のその後
- 小泉製作所の空襲以後、硫黄島戦そして沖縄戦に参加。同隊の 2 月中旬から 5 月中旬までの損失は、対空砲による 1 機、日本軍戦闘機による 2 機を含め 4 機。
- 沖縄戦参加中の 5 月 11 日、1 機の特攻機が大損害を与えた。この特攻機の搭乗員は群馬県碓氷郡八幡村、現在の高崎市八幡町出身の小川清少尉。
- この突入によって、バンカーヒル艦上の航空機のほとんどすべては破壊され、人的損失は戦死、行方不明 389 名、負傷者 264 名の甚大にのぼった。バンカーヒルの戦死者のうち、103 名は第 84 航空群に所属し、26 名は第 84 雷撃飛行隊の士官および兵だった。飛行隊の 15 機の TBM も飛行甲板と格納庫で荒れ狂う炎の中に燃え尽きた。
- 小川少尉の遺体は、粉々になった零戦の操縦席から投げ出され、しっかりとその姿をとどめたまま、甲板に転がっていた。彼の遺品が戦後 56 年ぶりに、高崎にいる遺族の元に戻ってきた。突入された艦船と突入した隊員の氏名、そして遺品が関係者の元に戻ってくることは希有な事。

空襲・戦災史のあらたなまとめ、遺跡の掘り起こし
- 上空の意図と地上の惨劇
- 戦争を遂行してゆくために、銃後においては平時とちがってさまざまな非日常的な生活が要求された。そして 1944 年 6 月からの B29 による本格的な本土空襲後、前線と銃後の区別は全くなくなり、それに歩調を合わせるかのような本土決戦体制、個人の体験として個別化されていた、この時期のさまざまな戦時下の体験は、まさに戦場体験にほかならない。
- 各種の体験記（軍・官・民）との照合

- 米軍史料の分析は日本側史料の空白部分を埋め、さらには日本側の伝聞・憶測の誤りや軍発表の虚構を克服。
- 地域が戦争で失った貴重なもの、地域が戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるためにも。
- 群馬の空襲・戦災史のあらたなまとめと遺跡の掘り起こしが今後の課題。

慰霊の考古学

- 兵士の遺体処理のあり様と兵士の霊魂の祀り方
- 陸海軍墓地、村や家の軍人墓、戦争記念碑
- 戦争記念碑－招魂碑、忠魂碑（日露戦争～1930 年代まで）、忠霊塔（1939 年～戦没者の遺骨を納める）への変遷とその歴史的背景
- 戦後に建立された民間人の戦争犠牲者慰霊碑
- 近代の戦争、戦死者と遺族、宗教にかかわるさまざまな問題
- 明治から昭和前半までに建立された戦争記念碑－戦没者を追悼しつつ顕彰し、次の戦争を準備する役割

慰霊と追悼

- 死者に対する儀礼と言語で、同じ日本語でも慰霊と追悼とはその意味内容が異なる。

追悼は通常死と異常死の両者ともに該当する語である。
慰霊は事故死や戦闘死など異常死の場合が主である。
そして追悼の場合は死者はあくまでも追想しながらその死が哀悼される死者であるのに対して、慰霊は事故死と戦闘死とで大きく異なる。

戦争遺跡・文化財の取り扱い①

・1970 年代から戦争展の開催
・1984 年、『南島考古だより』に「戦跡考古学のすすめ」
・1990 年、沖縄県南風原町で「南風原陸軍病院壕（正式名称－沖縄陸軍病院南風原壕群）」の文化財指定
　文化庁－近代化遺産総合調査
・1995 年、広島市の「原爆ドーム」が国の史跡
・1996 年、「原爆ドーム」が世界遺産に
　世界遺産となった広島「原爆ドーム」

- １９９５年３月、文化庁の「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」の一部改正
- 同年６月、国は原爆ドームを文化財保護法の史跡に指定
- 同年９月、世界遺産に政府推薦
- １９９６年１２月、世界遺産一覧表に記載
- その後 2010 年 7 月には、原爆ドームに続きビキニ環礁が世界文化遺産に登録

戦争遺跡・文化財の取り扱い②

・1998 年、日本考古学協会沖縄大会
・1998 年、近代遺跡（戦跡）の所在調査一覧
　43 都道府県から 544 件の遺跡報告
・1998～2006 年、沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（979 ヵ所）都道府県単位で全国初の試み
・2002～05 年、文化庁 50 件の詳細調査
・2003 年、世界考古学会議（冷戦時代の遺跡まで）
・2004 年、文化財保護法の改正

近代化遺産と近代の遺跡調査

- 文化庁建造物課－1990 年～「日本近代化遺産総合調査」

－建築史的・土木史的・技術史的観点に重点
1992 年、群馬県近代化遺産総合調査報告書（979 件）

- 文化庁記念物課－1996 年～「近代遺跡の全国調査」

－わが国の近代という時代におけるあらゆる分野の遺跡を対象とする
－一定のエリアを対象、例－田原坂
－歴史的観点に重点、例－原爆ドーム
－1998 年、所在調査一覧、43 都道府県から 544 件
－2002 年～05 年、詳細調査 50 件
－2012 年、報告書の刊行予定？

文化庁の詳細調査 51 件

- 北海道 3 件－第 7 師団、函館要塞、函館戦争関係
- 東北 3 件－第 8 師団、軍馬補充部など
- 関東 14 件－海軍土浦、東京湾砲台、2/26 事件、砲兵工廠、砲兵本廠（岩鼻）、小笠原、日吉台地下壕など
- 中部 3 件－松代大本営など
- 関西 6 件－舞鶴、第 4 師団、大阪砲兵工廠など
- 中国 10 件－呉、江田島、忠海など
- 四国 3 件－第 11 師団など
- 九州 7 件－大刀洗、佐世保、西南戦争、知覧
- 沖縄 2 件－海軍司令部壕、南風原陸軍病院壕
- 「代表的なものの多くを含むが、あくまで例示であって、価値の高い順に選んだ 50 の遺跡ではないと考えるべき」としているが、「近代化遺産総合調査」とほぼ同様な残存状況の良い建造物－戦災・戦闘経緯が認められない有形文化財－をその対象と考えるという傾向が窺える。

戦争文化財　指定・登録文化財

- 2011 年現在－文化財指定（国指定文化財 21 件、県指定 15 件、市区町村指定 80 件、国登録文化財 56 件など計 188 件、沖縄 15 件）
- 北海道・東北地方 30 件－屯田兵関連 17 件
- 関東地方 54 件－防空（群馬）、戦災（東京）
- 中部地方 19 件－師団（新潟・石川）
- 近畿地方 15 件－舞鶴（京都）
- 中国・四国地方 19 件－原爆・呉（広島）
- 九州・沖縄地方 51 件－原爆（長崎）、官軍墓地（熊本）、知覧・奉安殿（鹿児島／奄美大島）、人工壕・ガマ・集団自決跡地（沖縄）
- 大部分は有形文化財という建物や地上構築物が多い。

遺跡の時代範囲

- 文化庁の１９９８年「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」では「埋蔵文化財として扱う遺跡の時代範囲を、原則では中世までとし、近世は地域にとって必要なもの、近現代遺跡は地域にとって特に重要なものを対象にすることができる」としているのは、考古学調査研究の時代が拡大したことに反して、文化財調査の軛となっている。
- これに対しては、地域の近現代史や日本の近現代史を理解するためには欠くことのできない遺跡である、との認識が重要である。

戦争遺跡の重要性

- 全国各地の戦争遺跡調査
- 海外に残る日本の戦争遺跡調査
  - －旧満州の戦争遺跡
  - －東南アジアの戦争遺跡
  - －中部太平洋の戦争遺跡
- 地域が戦争で失った貴重なもの、地域が戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるうえで
- 過去文化の「負の遺産」、忘れてはならない事実の厳粛なるモニュメント

考古学的調査方法

- 資料を実測し、その使用方法や関連する空間的配置なども測量して図化し、記録を作成。
- 人間が行った特定の行為は、一方では物的証拠としての考古学資料を残し、他方ではその行為に関する記録が残される。しかし遺跡・遺物の遺存性の問題や調査の限界性から、考古学資料として残存している情報はごく断片的なもの。
- 記録についても常に同じ様な量で存在するとは限らず、残存状況の偏りを考慮。
- この二つの行為の残存形態を一つの歴史復元として合体させる努力。
- 様々な歴史資料を総動員して総合的・複眼的・立体的に地域の歴史像を構成する。

報 告

記念講演・菊池実「戦跡考古学の現状と課題」を聞いて　　遠藤美幸

２０１０年の国勢調査によると、１９４０年以前に生まれ、戦争体験のある世代は日本国民全体の１７％である。さらに戦闘体験のある世代の大半がすでに９０歳前後の高齢者だと鑑みれば、近い将来戦争の実像を肌で知る日本人が皆無となり、日本人の記憶から戦争のリアリティが年を追うごとに希薄になることは避けがたい現実となるだろう。生き証人がいなくなった後、残された私たちはどのように戦争のリアリティを後世に伝えていけばよいのだろうか？

今回、日吉台地下壕保存の会主催の記念講演で、菊池実氏が、日本人全てに投げかけられた、この差し迫った、そして重要な問いかけに、一つの解答と方法を示唆してくれた。菊池は、冒頭で、「人からモノ（遺跡や遺物）」を介在させ、戦争を語り継ぐことの意味と重要性を主張した。その際、戦争遺跡は、人に忌まわしい負の記憶を想起させるゆえに、破壊したい、消し去りたいと思わせる一方で、忌まわしい負の記憶だからこそ、それを記憶し、保存したいという欲求を喚起する場合があると。これを菊池は「負の記憶の両義性」と呼んでいる。まさに、「原爆ドーム」は、負の記憶の両義性の典型であり、私たちは、原爆の惨状を人類の歴史に再び刻むことがないように原爆ドームを残す道を選んだ。

しかし一方で、必ずしも戦争遺跡は、後世に戦争の悲惨さを伝え、忘れてはいけない戦争の実像を伝える強いメッセージを残すことを目的としたものばかりではない。文化庁は、戦争遺跡をあえて「軍事遺跡」と呼称することで、空襲のような住民への戦争被害や非戦闘員による軍需施設を戦争遺跡から排除し、あるいは戦争を美化、肯定するようなメッセージを付与した戦争遺跡を残そうとしている。

このように、モノ（遺跡や遺物）にどのようなメッセージを与えるかは、人によって決まる。戦争を否定することも、あるいは美化、肯定することも可能となるのだ。したがって、戦争遺跡から戦争の何をどのように語り継ぐかは、私たちの歴史認識に関わってくる。

このような観点からも、日本の戦争遺跡は日本国内だけではなく、むしろ日本軍が侵略した他国の領土に広く残されているという菊池の指摘は極めて重要である。戦争遺跡を一時の感情論や、政治的な手段の一つにしてはいけない。他国に残された日本の戦争遺跡をどのように扱っていくかは、戦跡保存の今後の大きな課題となるだろう。私たちがなすべきことは、人が残した証拠（文書・口述史料など）とモノとしての戦争遺跡を相互に検証し、歴史的事実を総合的かつ立体的に調査研究することである。この度、菊池氏の多くの示唆に富む講演を聞いて、歴史研究者の端くれとして、戦跡保存のためにできる限りの努力をしていきたいと改めて思った次第である。

総会資料

２０１１年度活動報告

東日本大震災から１年がたった。いまだに津波による瓦礫の片付け、原発危険地域への帰宅困難、農水産物の放射能汚染等解決していない問題が山積している。

この大地震のため日吉台地下壕の見学会を中止していたが（前年度既報）、慶應から専門業者に安全点検が委託され、安全が確認されたので、6 月から見学会が再開された。

会報が 100 号に達したので、「会報 100 号を発行して」として原稿を募集し、2011 年 5 月 13 日に 101 号を発行した（既報）。2012 年 3 月 17 日には「会報目次　第 1 号～104 号 1989.5～2012.1」として号数順と項目別の目次リストを作成した。

5 月 31 日　『日吉台遺跡群蝮谷地区発掘調査報告書～航空本部等地下壕出入口関連遺構の調査～』が慶大文学部民族学考古学研究室より発行された。「お世話になった方々」の欄に関係者名と日吉台地下壕保存の会の名が明記されている。

6月『史学』第80巻第2.3号抜刷「シンポジウム　キャンパスのなかの戦争遺跡～研究・教育資源としての日吉台地下壕～」が三田史学会より発行された。掲載された中に「〈報告2〉日吉台地下壕保存の会の活動」新井揆博報告がある。

6月11日に開催された総会の講演は「福島第一原子力発電所で何がおきたか？―基礎から読み解く原子力―」と題して筑波大付属高校の鈴木亨氏の時節にあったお話で、核物理や原子力発電、放射線のことをわかりやすく解説された。質問も活発であった。寺田寅彦の言葉「正当に怖がることはむずかしい」を引かれたが、「放射能を〈正当に怖がる〉ための知識やヒントを教えていただいた」との感想が寄せられている。

6月18日「2010日吉の戦争遺跡カイド養成講座」第4回開催。年度が跨がった上、地震のため変更したりしたが、7月2日第5回最終回は7名の参加で終了した。

ガイドの必要に迫られており、引き続き2012年3月17日「2011同講座」第1回開催。7月14日の第5回で終了の予定。山田・石橋運営委員の企画案にもとづき、比較的新しい過去と日吉周辺のことを学ぶ講座になっている。

6月24日大倉精神文化研究所にて同研究所と保存の会合同の聞き取り調査があり、芹沢宏氏、竹田行之氏から慶應の寮とのかかわり合いがあったと言う貴重なお話を伺った。

8月5日『日吉台地下壕のガイド事例集』発行　ガイド学習会の一つの区切りとして、各自で提出した「見学会説明ポイントの文章」を1冊にまとめた。

8月日吉台地下壕保存の会編『本土決戦の虚像と実像』が高文研より発行された。房総半島、日吉、登戸、松代等の遺跡が本土決戦とどう関わりがあったか分担執筆された。

本年度予定されていた最大の行事は「第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会」で、慶大キャンパスが会場であった。2010年秋より運営委員会、実行委員会を開催してきたが（既報）、2011年6月13日、7月18日につめの実行委員会が開催され、いよいよ8月6～8日の当日を迎えた。大会のテーマは「戦争遺跡を平和のための文化財に！」
日程の概略は次の通り。皆様のご協力のもと好評のうちに終了した。

8月6日：＊A-1日吉台地下壕見学会　＊開会集会　藤原洋記念ホール　挨拶は港北副区長・武田岩夫氏、慶應義塾長・清家篤氏　他　清家氏から「戦争遺跡は教育資源として大切である」と言うお話があった　＊アトラクションはひとみ座「二人三番叟」＊記念講演は白井厚慶大名誉教授「戦時下の慶應義塾と戦争遺跡」　＊報告は日吉：新井揆博、明治：渡辺賢二　他　司会：亀岡敦子　＊夕刻より全国交流集会　生協食堂

7日＊分科会（第１～3）来往舎　第１：「2年余りつづいているガイド学習会について」渡辺清、長谷川崇、中澤正子発表　第2：「海軍気象部分室の大倉山移転とその活動について」林宏美　第2：「軍都相模原の戦争遺跡悉皆把握の試み」石橋星志　他　＊閉会集会　来往舎　大会アピール「戦争遺跡を平和のための文化財に」が読み上げられた。

8日＊見学会　A-2・3　日吉台地下壕　B1・2　明治大学平和教育登戸研究所資料館
C貝山地下壕・海軍航空技術廠跡・野島掩体壕　D横須賀軍港・猿島要塞など

2～7日　企画写真展示　来往舎

6～7日　資料（書籍）交換会　来往舎

２０１２年度は三重県鈴鹿で開催の予定である。

10月1日、慶應義塾大学寄宿舎南寮見学が日吉キャンパス事務センターのご好意により行なうことができた。南寮と浴場が「横浜市歴史的建造物」に認定され、南寮は修復されることになり、すでに工事が始まっていた。

11月20日　横浜の３つの外人墓地（地蔵王廟・根岸外人墓地・英連邦戦死者墓地）をめぐるツアー開催。横浜女子マラソンと重なり貸切りバスはとりやめ、タクシー、電車、路線バスを利用、最後は交流会となり印象深いツアーであった。

12月10日「日吉をガイドする講座第6回」は、全国シンポジウムで聞かれなかった講演を聞こうと白井厚先生に来て頂いた。演題は「慶應義塾における＜学徒出陣＞」。ゲートルの巻き方を実演された時、戦時中の様々な事を思い出した方も多いのではなかろうか？

年が変わって2012年2月25日には「同講座の第7回」として是も全国シンポジウムの第2分科会で発表された林宏美氏から「大倉山と海軍気象部」のお話を伺った。

3月17日「ガイド養成講座」のあと生協食堂で大西会長のささやかな送別会を開催した。会長は沖縄内地留学の出発にあたり1年分の仕事の手配を整えてくださった。

日吉台地下壕保存の会

◆会員数：個人　３４０　団体　４

◆定期総会開催：第 23 回　２０１１年６月 11 日

◆運営委員会開催：６月～２０１２年４月　11 回

◆会報発行:101 号(5.13)(前年度既報)　102 号(6.20)　103 号(10.14)　104 号(2012.1.20)　105 号（4.27）

◆地下壕見学会：６月～４月　46 回　１６５１名

◆地下壕ガイド学習会　６月～4 月　６回

◆5.29～6.1「平和のための戦争展 in よこはま 2011」（実行委員会 3 回出席）

◆8 月　日吉台地下壕保存の会編『本土決戦の虚像と実像』高文研発行

◆8.6～8.8「戦争遺跡保存全国シンポジウム」　8.2～7 企画写真展示　（運営委員会、実行委員会、打ち合わせ会、会場準備等）

◆10.1「日吉フェスタ」（ヒヨシエイジ主催）　（9.10　フェスタ準備会出席）

◆10.1 日吉寄宿舎見学

◆11.20「横浜の 3 つの外人墓地をめぐるツアー」

◆12.10「日吉をガイドする講座」第 6 回「慶應義塾における〈学徒出陣〉」講師：白井厚氏
2012.2.25「同上」第 7 回　「大倉山と海軍気象部」　講師：林宏美氏

◆2.17　『赤旗首都圏版』「巨大な地下司令部」掲載

◆「2010 年度　日吉の戦争遺跡ガイド養成講座（ガイド養成講座)」6.18、7.2
「2011 同上」2012.3.17、4.14　5.12（2.17 打ち合わせ会）

◆3.24　ぴよ鯛まつり展示参加　日吉鯛ヶ崎公園

◆3 月　『未来を拓く挑戦者たち vol.5』（かながわボランタリー活動推進基金 21　平成 22 年度助成終了成果報告書）　に「慶応義塾大学日吉キャンパスの戦争遺跡を語り継ぐ」と紹介

2011 年度決算報告

2011年度　決算報告

（単位　円）

費　目	2011年度予算	2011年度決算	備考
【収入の部】			
会　費	250,000	326,990	291名
見学会資料代	500,000	453,440	内訳別項
図書等頒布	0	81,920	
寄付金等	0	9,138	
繰 越 金	392,561	392,561	
合　計	1,142,561	1,264,049	
【支出の部】			
運 営 費	200,000	84,184	各種会合・打合せ等
事 務 費	100,000	119,611	事務用品費等
印 刷 費	80,000	44,625	会報・資料等
通 信 費	200,000	176,770	会報郵送費等
図書資料費	110,000	135,100	書籍・資料等
交流・交通費	150,000	78,390	全国集会・各平和展賛助金等
謝　礼	60,000	65,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	0	0	
予 備 費	242,561		
合　計	1,142,561	703,680	
差引残高		560,369	

見学会開催費用内訳

【収入の部】		【支出の部】	
見学会費用	748,700	保 険 料	163,130
		振込手数料	2,130
		案内経費	130,000
		※資料作成費	453,440
合　計	748,700	合　計	748,700

※資料作成費は2011年度決算の見学会資料代に計上しています

以上の通り報告します

2012年5月14日　日吉台地下壕保存の会
会計　亀岡 敦子　印

この報告により収支を監査したところ、適性に処理されていることを認めます

会計監査　熊谷 紀子　印

会計監査　山口 園子　印

2012 年度予算

2012年度　予算(案)

（単位　円）

費　目	2012年度予算	備考
【収入の部】		
会　費	325,000	
見学会資料代	450,000	
図書等頒布	0	
寄付金等	0	
繰 越 金	560,369	
合　計	1,335,369	
【支出の部】		
運 営 費	100,000	各種会合・打合せ等
事 務 費	120,000	事務用品費等
印 刷 費	80,000	会報・資料等
通 信 費	200,000	会報郵送費等
図書資料費	150,000	書籍・資料等
交流・交通費	150,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝　礼	100,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予 備 費	235,369	
合　計	1,335,369	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました

2012年6月2日　日吉台地下壕保存の会
運営委員会

２０１２年度　運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会　長　　大西　章

副会長　　新井　揆博　　都倉　武之（会長代行）　　鈴木　順二

運営委員　　石橋　星志　　岩崎　昭司　　上野　美代子　　岡上　そう
亀岡　敦子　　喜田　美登里　　桜井　準也　　杉山　誠
鈴木　高智　　谷藤　基夫　　常盤　義和　　中沢　正子
中谷　俊吾　　長谷川　崇　　古川　晴彦　　宮本　順子
茂呂　秀宏　　山田　譲　　山田　淑子　　渡辺　清

会計監査　　熊谷　紀子　　山口　園子

顧　問　　鮫島　重俊　　白井　厚　　東郷　秀光

2012 年度活動方針

日吉台地下壕保存の会は発足以来 24年目になり、地道ながら保存会会員の方々はじめ、全国戦争遺跡保存運動に携わっている方々、日吉地域住民の方々と一緒に活動を続けることが出来てきました。

今年になり、PAC3の沖縄本島、八重山諸島配備など力には力で対抗することが正しいかのような日本国民をあおる政策や報道が頻繁に行われるようになりました。その力の論理の行き着く地点はどこなのでしょうか。20年以上も前に冷戦状態が終結し、世界各国が密接に絡み合ったネットワークで形成されるグローバルな世界の中で、我々は生きています。早く、力では問題が解決しないことに気がつき、力を使わずに解決するような平和な社会を実現させていきたいと思います。

昨年度は第 15 回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会を『戦争遺跡を平和のための文化財に！』のテーマの下に慶應大学日吉キャンパスで開催し、3日間で600名の参加者を集め、各地域からの報告、活発な討論が行われました。全国各地での戦争遺跡が次々に閉鎖されているなか、若い世代に戦争の特質を継承するためにも、平和の学びの場として戦争遺跡の保存が急務です。また、保存の会の全ての事業には港北区の後援が得られるなど、公的にも地域に密着した活動が認められました。慶應義塾も今春寄宿舎南寮を谷口吉郎氏の設計をできる限り活かしリニューアルしました。

今年はこの寄宿舎のリニューアルを契機に、『日吉平和ミュージアム』の建設に向けての一歩として、日吉台地下壕の研究を深め、資料集めなどを精力的にやりたいと思います。また、『日吉の戦争遺跡ガイド養成講座（ガイド養成講座）』のプログラムを充実させ、ガイドをできる方を増やして、頻繁に見学会を開き、多くの方に平和の尊さを伝えていく所存です。

そのために以下の活動方針を提案致します。

活動方針

○『日吉平和ミュージアム』の建設に向けて努力する。
○ 戦争遺跡指定の早期実現を文化庁に働きかける。
○ 日吉台地下壕見学会の内容を充実させる。
○ 小・中・高校生のための見学会を開催していく。
○『ガイド養成講座』を充実させ、ガイドの輪を広げていく。
○ 日吉台地下壕の学術調査・研究及び学習会を開催する。
○ 慶應義塾・横浜市・県・国への働きかけを港北区住民の方を始めとする地域の方々と連帯して行う。
○ 全国の戦争遺跡保存運動の会との連携を深め、保存運動を盛り上げていく。
○ 運営委員会の活動の充実と拡大強化をはかる。

お知らせ

第１６回戦争遺跡保存全国シンポジウム　三重県鈴鹿大会要項

大会テーマ『戦争遺跡を平和のための文化財に』

１．主催　戦争遺跡保存全国ネットワーク
第１６回戦争遺跡保存全国シンポジウム三重県鈴鹿大会実行委員会

２．後援（予定）　三重県、三重県教育委員会、鈴鹿市、鈴鹿市教育委員会
ＣＮＳ、鈴鹿ボイスＦＭ

３．趣旨

三重県鈴鹿市は１９４２（昭和１７）年に市制を施行しました。当時建設中だった鈴鹿海軍工廠の建設主任の働きかけで２町１２ヶ村を合併して誕生した「軍都」であり、軍主導で市制が施行された日本最初の市でした。この地域には１９３８年開隊の海軍鈴鹿航空隊を端緒に、４０年には三菱重工業、４１年には第二海軍航空廠鈴鹿支廠･陸軍北伊勢飛行場、４２年には第二鈴鹿海軍航空基地･陸軍第一気象連隊･第一陸軍航空軍教育隊、４３年には鈴鹿海軍工廠･亀山陸軍病院、４５年には陸軍本土戦用の椿秘匿飛行場と相次いで陸海軍の軍事施設が建設され、多くの戦争遺跡が残されました。

鈴鹿市では、市制６０周年に当たる２００２年に鈴鹿市考古博物館で特別展『戦争遺跡を掘る』を開催、同年に戦争遺跡と旧軍施設をまとめた『鈴鹿市のあゆみ』を発刊するなど、早くから戦争遺跡に対しての理解があり、２００３年には鈴鹿市三畑町に残る陸軍のコンクリート製掩体を、戦争遺跡としては県内最初に国登録文化財に指定しています。

反面、戦争遺跡の開発による破壊も徐々に進んでいます。特に鈴鹿海軍航空隊跡地に残されていた３棟の格納庫は全国的にも貴重な戦争遺跡でしたが、大規模開発により消滅しました。現在は市の施設に一部部材が保存されています。

格納庫の保存をめぐって市民や市議会、行政等で多くの議論がなされましたが、痛感したのは戦争遺跡がまだまだ文化財として認知されていないことでした。１９９５年に文化財の範囲が「江戸時代末または明治時代初期まで」から「第二次世界大戦終結頃まで」に拡大されましたが、戦争遺跡に対する意識は地方公共団体によって大きな差があります。こうした遺跡は戦争の本質や市の誕生を考える上で重要であり、地域の文化財として市民や行政が積極的に関わって保存･活用をはかるべきものであることをさらに広く強く呼びかける必要を感じました。

私たちはそうした立場から大会のテーマを『戦争遺跡を平和のための文化財に』というスローガンを掲げました。市制７０周年という記念すべき年に、全国の皆さんと一緒に平和のために戦争遺跡を保存･活用する意義を深めると同時に資料館などを設置し平和教育を推進できる場を各地につくる運動を展開したいと思います。

４．日程と会場　２０１２年８月１８日（土）～２０日（月）

○会場案内（鈴鹿市文化会館）

・近鉄鈴鹿市駅からタクシーで８分（鈴鹿市駅から時間限定で送迎します）。
・近鉄三日市駅から徒歩８００ｍ（１５分）
三日市駅及び鈴鹿市駅までは、近鉄名古屋駅から津方面急行で伊勢若松駅まで５０分、伊勢若松駅から近鉄鈴鹿線で５～１０分
・ バス
三重交通で白子駅西→鈴鹿市駅→鈴鹿市文化会館の路線がありますが、日に数本しかないので不便です。
・ 自動車での移動が便利です。駐車場は完備されています。

会場と鈴鹿市駅間の送迎時間
１８日…１０時１５分～１０時５０分
１２時１５分～１２時５０分
１６時４５分～１７時１５分
１９日…　８時１５分～８時５０分
１７時～１７時３０分

○８月１８日（土）　鈴鹿市文化会館けやきホール

１０：３０　会員受付開始（研修室）　　鈴鹿市駅→会場への配車 10:15～10:50
１１：００～１２：００　全国ネット会員総会（研修室）
１２：００　全体会受付開始（けやきホール）
１３：００　開会セレモニー（けやきホール　司会：現地実行委員会）
　・主催者挨拶（現地実行委員会）１０分
　・歓迎挨拶（三重県知事、鈴鹿市長に要請中）１５分
　・朗読劇「鈴鹿その時」（麦わら帽子の会）２５分
１３：５０　記念講演　清水　信『戦争の記憶と文学』　６０分
１４：５０　休憩
１５：０５　基調報告　十菱駿武『戦争遺跡を平和のための文化財に』３０分
　地域報告　浅尾　悟『格納庫保存運動と軍都・鈴鹿』２０分
　各地報告　（全国からの参加団体より）２０分
１６：１５　閉会挨拶　終了後分科会打ち合わせ（１６：２５終了）
　・交流集会参加者は平安閣のバスで会場に移動
　・鈴鹿市駅への配車　16:45～17:15
１７：３０　全国交流集会（平安閣　司会：現地実行委員会）　参加費５０００円
　・挨拶（戦争遺跡保存全国ネット代表、現地実行委員会）
　・各地からの報告
　・第１７回大会開催地の紹介と挨拶
１９：３０　交流集会閉会　（白子駅など最寄りの場所までバスが出ます）

○８月１９日（日）　鈴鹿市文化会館

９：００　　受付開始　（※８：１５～８：５０　鈴鹿市駅～会場への配車）
９：１５～１５：００　分科会（１２：００～１３：００昼食休憩）
　・第１分科会「保存運動の現状と課題」（さつきプラザ）
　・第２分科会「調査の方法と整備技術」（第１研修室）
　・第３分科会「平和博物館と次世代への継承」（第２研修室）
１５：１５　閉会集会（さつきプラザ、司会：全国ネット、現地実行委員会）
　・開会の言葉（全国ネット事務局）
　・各分科会からの報告（分科会担当者）
　・大会アピール
　・閉会挨拶（現地実行委員会）
１６：０５　終了（会場撤収１６：３０）　※鈴鹿市駅への配車 16:15～16:50

○８月２０日（月）　現地見学会（２コース）　バス使用

（１）鈴鹿と北部コース（鈴鹿市、四日市市、菰野町）

定員４５名（２０名未満なら中止）　料金４０００円

９：００　白子駅発
鈴鹿海軍工廠工場跡（平野町）→鈴鹿海軍工廠着弾場跡→陸軍コンクリート掩体（鈴鹿市）→（昼食　イオンタウン菰野）→千種演習場跡（菰野町）→凱旋門（菰野町）→陸軍菰野飛行場指揮所跡（菰野町）→奉安殿（四日市県小学校）

１６：００　近鉄塩浜駅解散

（２）志摩半島コース（鈴鹿市、志摩市、南伊勢町）

定員４５名（２０名未満なら中止）　料金５０００円

９：００　津駅西口発
第１９特攻戦隊迫間基地（南伊勢町　現地まで船で１０分。昼食も）→小山陣地トーチカ（志摩市阿児町）→七尾田陣地トーチカ（志摩市阿子町　時間があれば）→築地トーチカ（志摩市磯部町）

１６：００　近鉄磯部駅解散（近鉄特急で名古屋駅まで２時間、大阪まで２時間半）

５．写真展示、書籍販売

○写真展示（各地の戦争遺跡と保存の取り組みなど）

・８月１８日（土）　１１：００～１６：３０　鈴鹿文化会館ロビー
　１９日（日）　９：００～１６：００　鈴鹿文化会館さつきプラザ

・事務局では現在１５団体から各５枚ずつパネルを預かり、毎年展示しています。新たな出展希望がありましたら、竹内（携帯番号）までお問い合わせの上、送付してください。送付締め切りは８月６日です。
〒519-1121　亀山町加太梶ヶ坂 3046-10　岩脇　彰
(0595-98-0368　ファックス兼用)

○書籍交換会

・８月１８日（土）１１：００～１６：３０　鈴鹿文化会館ロビー
　８月１９日（日）　９：００～１５：１５　鈴鹿文化会館さつきプラザ

・書籍は以下の住所に８月１５日までに必着、または当日お持込ください。
書籍販売希望票も８月１５日までに以下まで郵送またはファクスまでお願いします。(〒519-1121 亀山市加太梶ヶ坂 3046-10　岩脇　彰 FAX0595-98-0368)

・書籍には１冊ごとに表紙に付箋をつけ「取扱い団体名」（または「書籍名」）と「価格」を記入してください。

・１日目終了後に書籍を会場内の保管場所に移動します。２日目朝は保管場所からさつきプラザに移動します。持ち込まれた団体にお願いしますが、無理な場合は事務局にお知らせください。連絡のないまま移動されなかった書籍は２日目の展示を認めません。

・会計処理は８月１９日の１５：１５～１６：１５に行います。書籍残部と代金を受け取ってください。それまでに帰られる場合は、事前に会計処理を済ませてください。収益の１０％を戦跡ネットに頂きますのでご了承ください。

・クロネコヤマトが１９日１２：００～１３：００と、１５：００～１６：００に会場に来てもらえます。箱も販売してもらえます。書籍の宅配にご利用ください。徒歩５分のコンビニからも発送できます。

６．参加費など

・一　般　　２０００円（１日参加者は１０００円）
・大学生・大学院生　１０００円（１日参加者は５００円）
・高校生以下　　無　料
・交流会参加費　５０００円（１８日　１７：３０～１９：３０　平安閣　飲み放題）
・宿泊の斡旋はありません。当日は鈴鹿サーキットでレースが開催されるため、市内のホテルは大変混雑しています。
・昼食　近くの飲食店をご利用ください。最寄りの飲食店マップを用意します。
　役員の方には１８日のみ昼食（カレーライス）を５００円で用意します。
　（役員２０名、スタッフ３０名の計５０名分を予定）

７．現地実行委員会組織（案）

実行委員長　加藤二三子
副委員長　　竹内宏行
副委員長　　中森成行
事務局長　　岩脇　彰
会　計　　中村千秋
鈴鹿市の戦争遺跡を保存･平和利用する市民の会会員、三重県歴史教育者協議会会員
三重の自然と文化財を守る会会員、麦わら帽子の会会員、鈴鹿市民有志

８．参加申し込みについて

・参加される方は事前にお申込みください。申込〆切８月６日。〆切時点で最低人数に達していない現地見学は中止します。
・申しこまれる時は別紙の申込用紙でお願いします。（〆切８月６日）
　申込先･お問い合わせ　〒519-1121　三重県亀山市加太梶ヶ坂 3046-10
　電話･ファックス　０５９５－９８－０３６８
　メール　iwasan@ztv.ne.jp
・費用は郵便振替で以下の所までお願いします。（〆切８月６日）
費用送付を確認できた時点で申し込み完了とさせて頂きますのでご了承ください。
　郵便振り込み口座番号　（現在手続き中です）
　加入者名　中村千秋
・現地見学が中止になった場合、振り込んで頂いた現地見学費用は大会当日、または振替にて返金いたします。

９．分科会レポートについて

・分科会にレポート報告を希望される方は、事前にお申込みください。申込〆切は６月３０日です。
・報告者は全国ネットの個人会員か団体会員の方に限ります（所属される団体が加盟していれば可能です）。未会員の個人は会員登録をお願いします。
・レポートの要約を大会資料集に掲載します。報告される方は要約をＡ４版２枚にまとめて、７月１０日までにお送りください。電子データで送っていただけると助かります。
・レポート申込、要約の送付先は以下の通りです。

戦争遺跡保存全国ネットワーク事務局　〒３８０－０９２８　長野市若里３－５－５
きぼうの家　松代大本営の保存をすすめる会気付
電　話：０２６－２２８－８４１５　ファクス：０２６－２６２－１８３１
メールアドレス：kibonoie@nifty.com

報　告

ガイド養成講座について

運営委員　石橋星志

これまでガイド養成講座は、年度内完結で実施してきましたが、一昨年は昨年開催の戦争遺跡保存全国シンポジウムまでを区切りとして、年度をまたいでの計画を立てました。今回のガイド養成講座も、２０１１年度～１２年度にかけて実施する形となっています。すでに、２０１２年３月１７日に開講し、４月１４日、５月１７日、６月９日と回を重ね、実習に位置づけられている毎月の定例見学会にも多くの講座参加者を迎え、ますます活気が出ています。詳細報告は今後の会報に譲り、今回は第１回の講座の資料を掲載します。

資　料

2011 年　第一回ガイド養成講座　　2012-3-17

日吉の海軍施設の概要

長谷川　崇

◎　地下施設　　日吉台地下壕
（1）　連合艦隊司令部地下壕
1944 年８月 15 日より工事開始出来次第使用、内部には長官室、電信室、暗号室、作戦室、etc がある。
その他軍令部第三部（情報部）、東京通信隊（通信関係に関する業務）
航空本部（航空機等の調達）

(2)　軍令部第三部（情報部）待避壕
第一校舎で勤務するスタッフが一時避難する防空壕、1944 年 7 月工事開始

(3)　人事局地下壕　　1944 年 11 月より工事開始
特に開戦中の将官クラスの異動、指揮官、艦長が戦死など即交代を必要の人事を扱う

此処までが日吉キャンパス内にある総延長 2600m の地下壕

◎ 日吉駅西側、日吉の丘公園（夕日山）下

(4)　艦政本部地下壕
軍船、兵器などの調達、特に戦争末期では特攻兵器（回天、震洋、伏龍）
etc、の設計生産。1945 年１月より工事開始、完成 1945 年８月１４日
総延長　2400m

従って日吉の地下壕は　合計　5000m

◎ 地上施設

(1)　第一校舎
大学予科生［戦後の大学の教養課程に相当］の校舎、立派な設備
戦争末期学徒出陣により生徒少数
1944 年 3 月 10 日より海軍との賃貸契約で軍令部第三部（情報部）が使用
世界の情報収集、分析　　兵士約 300 人

(2)　チャペル（礼拝堂）
第一校舎の軍令部第三部の分室
情報収集について、外国語、ラジオ放送、等の翻訳に哲学者の鶴見俊輔、
エリザベスサンダースホームの澤田美喜家族、理事生（女子）と高官の軍人などにより使用された。
應應義塾大学キリスト教青年会（YMCA）明治 31 年発足、その後 1937（昭和 12）年
建立設計者：アメリカ人宣教師ウイリアム・メレル・ヴォーリズ
近江兄弟社の創業者

(3)　耐弾式竪穴坑
地下壕の空気取り入れ口、地上にある　残された一基

(4)　慶應義塾大学［日吉］寄宿舎　　三棟、（南寮、中寮、北寮）
1944 年９月 29 日より連合艦隊司令部地上作戦室、
床暖房、水洗トイレ、食堂、手術室、他に円形風呂（ローマ風呂）
1937（昭和 12）年建設、設計者：谷口吉郎

日吉キャンパスは戦後 4 年間米軍が接収 1949（昭和 24）年慶応義塾に返還
第一校舎は高校校舎となり現在にいたる。

(5)　日吉台国民学校［現：日吉台小学校］（日吉駅西側）
海軍省人事局功績調査部、戦争における功績のあった人の調査、記録作成、保管

（追記）
東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊　（昭和５年～20 年８月）
川崎市高津区蟹ヶ谷所在、海軍の受信基地主に作戦上の軍秘により
日吉への司令部にも内容報告

大倉山海軍気象部　（大倉山精神文化研究所）
昭和 19 年６月から終戦まで気象部が借用

資　料

2011 年第１回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座　報告要約

テーマ：「海軍が日吉に来るに到った歴史的経緯とその意味」

茂呂秀宏

○日吉には連合艦隊司令部だけでなく海軍の諸機関が移転してきているが、移転の理由として①部隊の増強のための移転(軍令部第三部)、②戦況の変化に対応した移転(連合艦隊司令部)、③霞が関の空襲対策(航空本部)としての移転の３つの要素が考えられる。

○具体的には、情報機関である軍令部第三部は開戦時 19 名(敵国である対米課は４名)であったものが、敗戦時においては２９４名(対米課は１１３名)になっており、1944 年３月の霞が関から日吉台への移転はこの増員のためには必要不可欠なことであった。連合艦隊の司令部については、1944 年の古賀長官時代から戦局の後退局面の中での通信能力の拡大の要請などの理由からそれまでの司令部指揮官最前線という考えを転換させ、司令部を艦上から陸上に移すべきという意見が内部から出ていたが実現はせず、古賀長官の死後豊田長官の時代の 1944 年 9 月 29 日に日吉に移転することになった。航空本部については 1945 年５月の霞が関空襲の直後に日吉に移転してきている。このような３つの要素の累積として日吉台の海軍施設群が生まれたのである。

○日吉の海軍施設群を作り出す背景には、日本軍の敗退過程における米軍の日本侵攻作戦と本土決戦を含めた日本の側からの迎撃作戦がある。具体的には、ミッドウェイ海戦の敗北を経ての１９４３年後半のカイロ会談で米英中による日本本土侵攻作戦が確認され 1944 年７月のマリアナ開戦後のアメリカ軍による本土侵攻作戦の策定とそれに対応して日本側から 1 号～4 号の捷号作戦が策定され、その後敗戦までの日本の後退戦の枠組ができあがり、日吉の連合艦隊司令部からレイテ戦、硫黄島の戦い、沖縄戦の作戦命令が出されていった。
　本土決戦の時間稼ぎとされた沖縄戦の敗戦のあと本土決戦準備体制に入るが、直前にポツダム宣言を受諾し回避された。もし本土決戦に突入していった場合、茅ケ崎を上陸予定地としたアメリカ軍の本土上陸作戦であるコロネット作戦に対して、日本軍は日吉の海軍総隊司令部から水際の特攻作戦が司令されたであろう。米軍上陸後においては沖縄戦の状況を想起するまでもない。

○現在港北区で利用されている自由社版中学歴史教科書には、本土決戦を避ける選択は天皇による「ご聖断」であったという。この「ご聖断」は確かに本土決戦派を抑えるためには必要であったろうが、そもそも戦争を開始し一撃講和論で戦争を長引かせ沖縄戦、広島・長崎の原爆被害を国民に強いた責任を回避させる表現であり、「聖断」など称することは誤りである。
　また天皇が本土決戦回避の判断に至った理由は、本土決戦により米軍の直接統治による天皇制・国体の廃絶を避けることであるが、もう一つ大きな理由としては、国内内部からの反体制運動の高揚を事前に抑制することにあった。家永三郎の「太平洋戦争」(1968 年、岩波書店)によれば、戦争末期には国民には厭戦気分がひろがり、３月１０日の東京空襲の直後現場を視察していた軍の将校をののしる被災者や軍における逃亡の急増などなどが例示されている。本土決戦回避の判断材料になったことについては否定できない。

○歴史は決して必然的なものではなくその時々に生きている人々の選択によっている。アジア太平洋戦争の開戦には国民の同意なくしてはありえなかったし、ポツダム宣言の受諾には、国民の厭戦意識、反戦的言動がなければありえなかった。状況によっては本土決戦に突入し多くの尊い命が失われた可能性は十分にあった。

○戦争遺跡を保存し戦争の記憶を物として残し戦争の学習をする理由は、侵略戦争に加担せず反戦の意思を表明しそれを阻止する歴史の選択ができる主体を育成していくことにある。

資　料

２０１２（H24）ガイド養成講座　第１回　　２０１２．３．１７

会の設立と活動について～戦争遺跡保存全国シンポジウム発表に基づいて～

中沢正子

★はじめに
　2011 年８月慶大日吉キャンパスで開催された「戦争遺跡保存全国シンポジウム」の分科会で発表した「２年あまりつづいているガイド学習会について」をもとに、語るもので、当日のレジュメはすでに『会報』103 号に掲載されているので、これは補足である。
★日吉台地下壕見学ことはじめ
　日吉台地下壕保存の会結成以前のことを書かれた寺田氏（事務局長・4 代目会長）の文章（慶應生協 34　1986.11.25）がある。
＊昭和 30 年代には地下壕への出入口はあちこち開いていて、どこからでも入れた様に思う。
＊高校の南側ケヤキ並木のところに、コンクリートの直角３角形をした出入口があったが、塞がれていた。(この出入口については私〔中沢〕も知っている。後に子どもがこの建造物で遊んでいる写真を提供された方がある)
＊1985（昭和 60）年夏、工務課の人から「永戸先生（初代会長）ほか何人かの先生が地下壕に入られるが一緒に参加しませんか」と声をかけられ、8.26 に入った。壕の中は地下水が流れ、泥が出入口から流れ込んでいるというので、長靴、ヘルメット、長袖の上着、懐中電灯、地図、カメラと言う装備。壕内の酸欠、落盤を心配。冬暖かく、夏涼しい所。

＊高校の先生、文化地理研究会の生徒が入りたいと。10.5 に案内。塾生新聞の学生記者も入坑。塾生新聞 10.10 に掲載。1985 年慶應高校日吉祭の文化地理研究会の展示で発表。
＊1986.8.23、慶應生協教職員委員会の主催で寺田のリーダーのもと地下壕探検。元海軍特別少年兵として地下壕で暗号解読の任務に当っておられた鹿島光雄氏も参加お話を伺う。鹿島氏の見学記は慶應生協 33　1986.10.8 に掲載。
＊1969（昭和 44）年、慶應高校生有志が地底研究会を組織して調査、発表した「わが足の下」がまとまった資料の唯一のもの。「慶應義塾百年史」「三田評論」「連合艦隊の最後」などに断片的に書かれている。
★「日吉台地下壕保存の会」結成 1989.4.8。（会報１　1989.5.10）
正式名称「連合艦隊司令部日吉台地下壕の保存をすすめる会」
★会則改正案から会の目的を要約する（会報 45 号　1998.4.4）
第 2 条（目的）1.史跡として保存するための運動をすすめる。2.調査・研究をすすめる。3.保存する意義を市民に広め、永く後世に語り伝えられるようにする。4.戦争と平和の問題を考え、学習できる「平和記念資料館」（仮称）を建設する運動をすすめる。
★永戸多喜雄会長の呼びかけ（会報第１号　1989.5.10）
要約「20 世紀の史跡として保存しようという会が発足してから１カ月。教職員有志、空襲下の日吉で生きた人々、旧海軍関係者、地域で子供たちの教育にたずさわる教師たち、きわめて穏和だが、平和への熱い想いを胸に秘めた周辺の市民が、一つの目的のために会を結成した。画期的な出来事で責任は重い。地下壕の証言に耳を傾け、二十世紀の最後を生きる私たちに地下壕がつきつける問い掛けに答えながら設立総会で採決された目的を実現させるために歩き始めましょう。」
★『慶應日吉キャンパスピースウォーク』の刊行　何種類かを提示。
★「日吉地下壕入坑ガイドライン」完成　ファイルを提示
H17（2005）.4 作成、H20.1 一部改正、慶大総務部、日吉キャンパス事務センターで作成され、それに添って見学会実施に。
★地下壕見学会お知らせにみる流れ
見学会は会報１(1989.5）から、会報 35（1995.9）までを見ていくと、ほぼ１年１回の開催となる。会報 49（1999.4）ルール作り、会報 57（2001.4）蝮谷出入口工事完了、会報 60（2002.1）定例見学会実施に移行する過程が読み取れる。会報は原則として季刊。
★継続的事業のはじまり
＊1989.4 発会式総会（会報１）＊1989.5 会報発行（会報１）＊1992 平和のための戦争展１（頭に川崎・横浜又は横浜・川崎をつける）（会報 20）＊1996 平和のための戦争展かながわ 1996(会報 39)~1998（会報 47）中止　＊1997 平和のための戦争展 in よこはま（会報 41）＊1997 戦争遺跡保存全国シンポジウム１（会報 41）＊2005 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 2005（会報 76）＊日吉をガイドする講座１　2009（会報 90）
＊次々に企画される事業に一人一人が少しずつ力を出し合ってきた。
★2010 年度三田史学会大会シンポジウムに参加（史学第 80 巻第 2･3 号抜刷　2011.6 より）
＊「シンポジウム　キャンパスのなかの戦争遺跡～研究・教育資源としての日吉台地下壕～」と題して報告とコメントが発表された。報告２「日吉台地下壕保存の会の活動」を新井揆博が、コメント３「アジア太平洋戦争と慶應義塾」を都倉武之が発表した。
＊蝮谷体育館建設に当って工事中に発見されたＢ地点航空本部等地下壕の出入口の扱について「日吉台地下壕に関する諮問委員会答申書 H21.1.21」によると、義塾からの提案のあった３つの対応案のうち「第３案：北側移動案」の採用が望ましいと答申。
＊「教育環境改善の現実と日吉台地下壕の保存。日本近現代史研究のみならず、世代を超えたコミュニケションの触媒となることで戦争の記憶を後世に伝えることを可能にする、高い学術的・教育的価値をもつ文化財として評価」とある。
★ガイド学習会で討論されてきた内容（『日吉台地下壕のガイド事例集』2011.8 より）
皇紀と西暦、第一校舎のカップの地図は何を意味するか、軍令部第三部の退避壕、施設や部隊設置年及び人員、福澤諭吉特に「脱亜論」、壕内の施設・設備、グランド、チャペル、通信機の台数、蛍光灯、直流・交流、本土決戦、朝鮮人の調査、児童の落下死亡事故、空襲の実態がわかる港北区地図、日吉電話局、平和学など。
★おわりに
現役で頑張っているガイドは 60 歳代､70 歳代が殆どで交代の時期が近づいている。一方、見学者が多い日には地下壕内で班別となり、ガイドの必要性が高まる。１人でも多くガイドとして参加されるよう一同心から願っている。

連　載

地下壕内設備アレコレ【その 5】　Z 工法，Z8 工法

運営委員　山田　譲

今回は地下設備そのものではなく、そのつくり方、地下壕の築造（海軍用語では「築城」と言っていました）の仕方の話です。Z8 工法は日吉台の海軍壕を築造した時の工法として、見学会でいつもお話しているものです。この Z 工法とか Z8 工法というのは、海軍施設本部の用語で、建築学の用語ではありません。

では Z 工法とはどういう意味で使われていたのでしょうか。それは「前線における耐弾施設の急速施工法」(『海軍施設系技術官の記録』第 3 章　海軍施設技術の変遷　佐用泰司氏　以下引用は同書）ということで、爆弾や砲弾に耐えられる軍事施設を短期間につくる工法のことです。つくる施設はそれほど大規模なものではなく、前線での陣地づくりや飛行機の格納施設をいろいろ考案して築造していました。その工法の種類により Z1~Z7 工法が考案され、その延長上で Z8 工法も考案されたわけです。

これらの Z 工法の要点は、耐弾強度だけでなく、さしせまる米軍の攻撃に間にあわせるために、短工期ということが重視されました。アジア太平洋戦争の後半期では、南洋諸島に展開した日本軍は次々と敗退し部隊全滅（「玉砕」）をくりかえす悲惨な戦況でした。この防衛線の後退を少しでも遅らせようとして、陣地構築を急いだわけです。ですから短工期ということが耐弾強度以上にせまられていたわけです。

ではそれは、どのような工法だったのでしょうか。

Z1 工法――「鉄枠製組立式トーチカ」工法。

Z2 工法――「高強度コンクリートブロックを急速に組積して造るトーチカ」工法。

（前掲書　大島久次）

Z３工法――「土中に大型ゴム管の型枠をコンプレッサで膨らませ、これを体心とする鉄網コンクリートを打設し、硬化後空気を抜いてゴム管を取り出すもの。」

Z4 工法――記載無し。

Z5 工法――「土饅頭工法とも言い‥‥主として饅頭型に土堆体を形成し、これを体心として鉄網コンクリートを打設し、硬化後土堆体を掘毀し、この土を覆土に利用するもの。」

Z6 工法――「特殊型枠を巧みに応用する鉄網コンクリート施設工法」

Z7 工法――「爆力、または爆力によるセメント注入を応用した急速隧道および地下施設施工法」　（同書　佐用泰司）

これらの Z 工法はだいたいは地表施設の築造工法ですが、Z8 工法はちょっと異質です。それは地下深くに掘った地下壕のための工法です。この工法は「第 300 設営隊隊長山本将雄氏と株式会社利根ボーリングとが共同開発した長孔穿孔式試錐機による特殊穿孔方法で、取り扱いも簡単に短時間で直径 100～150mm の長孔穿孔が可能」。

その使用例としては、

① 「コンクリート覆工の際、‥‥任意の地表面からのコンクリート・シュート孔」

② 「地下発電室の消音排気孔」

③ 「地下無線室のアンテナ線引込孔」

④ 地下無線室付属バッテリー充電室の有毒排気ガスの排気孔」

などが上げられています。　（同書　第 3010 設営隊元隊長伊東三郎）

この Z8 工法を使って、日吉以外でも日本内外各地に地下司令部や地下施設をつくったわけです。

報　告

悲劇を繰り返さないためにー
「原発問題」と「戦争・空襲」を中心に「２０１２戦争展よこはま」を開催

吉沢てい子

実行委員長の小山内さんのあいさつ

５月２９日の横浜大空襲の日に合わせて開催してきた「平和のための戦争展 in よこはま」は、今年で１７回目。５月２７日（日）及び６月３日（日）に講演を、５月３１日から６月２日まで展示をかながわ県民センターで開催しました。

今年の戦争展は、原発事故から１年余経過し、再稼働をめぐって激しい綱引きが行われている中での開催。「アジア太平洋戦争や空襲」と「福島第一原発事故」・・・至った経過と命を脅かすものが重なって見える。こうした悲劇を繰り返さず、平和な未来に貢献できる戦争展にと実行委員会で準備してきました。

初日の５月２７日は「原発問題」を中心に講演会。あいさつをした実行委員長の小山内美江子さんは「いま、戦争がなくても、放射能で一日一日命が脅かされている。原発を再稼働させないために原発のいらない生活に工夫しよう。今がよければ、自分さえよければよいのでしょうか。子どもたちの未来のために、考え行動しよう」と呼びかけました。続いてフェリス女学院大学エコキャンパス研究会が「自然エネルギーの活用で脱原発は可能」と「未来マニュアル」を紹介。ＴＢＳをやめ福島で農業を営み、今回の原発事故で難民となった日本人初の宇宙飛行士であり、ジャーナリストの秋山豊寛さんは、チェルノブイリの取材経験から「政府は住民より秩序維持を優先させる。内部被ばくや低線量の放射能の影響は計り知れない、子どもや孫に負債を残してよいのか、停止した原発を廃炉に」と講演しました。

川和中学校演劇部の朗読

６月３日の特別企画は「戦争と空襲」がテーマ。川和中学校演劇部の生徒たち２５人が、日本人の母とアメリカ人の父を持つ女学生が横浜大空襲を体験し戦後を生き抜いた物語を朗読。港北区在住の冨岡直子さんは、硫黄島で戦死した伯父の手紙を映画に触発された元米兵から返され、日米の高校生に平和授業を行っている、その奇跡的な経過と戦争の真実について講演。東京大空襲・戦災資料センター主任研究員の山辺昌彦さんは、陸軍参謀本部の宣伝機関・東方社の撮った米軍による東京での空襲の写真を分析発表。銀座・原宿などの繁華街、慶応や上智大学、神社、住宅など爆撃された写真を紹介し、改めて無差別爆撃で空襲の本質が明らかにされました。

展示は横浜大空襲を中心に、東京での空襲も展示。原発問題では、原爆・第五福竜丸・チェルノブイリ・原子力船むつ・原子力空母・福島第一原発事故など一連の経過と脱原発未来マニュアルを。日吉台地下壕、登戸研究所、アジアでの戦争、教科書、船と戦争、横浜・沖縄の米軍基地、米軍機墜落事故、憲法９条タペストリー、空襲体験画、平和のバラ、WFP など含め約５００点を展示しました。

今年は、中学生、大学生、若い教員などの参加が目立ちました。慶応受験予定の予備校生は「日吉台地下壕について、展示を見て初めて知った。ぜひ、合格して、歴史を学び、こうした取り組みに関わりたい」と希望を語ってくれました。若い人たちが積極的に意思表示をしてくれたのが、今年の特徴です。３１１が促しているように思えます。「悲劇を繰り返さないために、次世代に伝え、ともに考える」大きな犠牲の中から、その糸口が見えてきました。

お知らせ

港北区区民活動支援センター発行の地域歩きのガイドマップ「マイ歩―夢タウン港北」に日吉台地下壕が掲載されました。
　３月発行で、４月から区の施設などで配布されています。

活動の記録　　2012 年４月～６月

４／１８　地下壕見学会　慶応大学仏文科ＯＢＧ　10 名
４／２５　地下壕見学会　9 条寒川・埼玉杉戸・宮川平和委員会　28 名
４／２７　会報 105 号発送作業（日吉地区センター）
４／２８　定例見学会　42 名
５／１２　2011 年度第 3 回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座（来往舎中会議室）
５／１６　運営委員会（日吉地区センター）
５／２２　平和のための戦争展 in よこはま実行委員会（かながわ県民センター）
５／２３　地下壕見学会　みどりヨコハマ人クラブ　12 名
５／２６　定例見学会　46 名
５／２８　地下壕見学会　コープかながわ港北区エリア会　35 名
５／３０～６／３　「第 17 回平和のための戦争展 in よこはま」開催　講演・展示等
　　参加者約 2000 名
５／３１　地下壕見学会　神奈川人権センター　53 名
６／２　日吉台地下壕保存の会第 24 回定期総会（来往舎大会議室）
６／６　地下壕見学会　自治労神奈川労働組合　14 名
６／９　2011 年度第 4 回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座（来往舎中会議室）
６／１１　日吉地区センター自主事業「わが街再発見～日吉の空襲と日吉台地下壕」45 名
　　（日吉地区センター）　茂呂・喜田
６／１３　平和のための戦争展 in よこはま実行委員会（かながわ県民センター）
６／１８　地下壕見学会　日吉地区センター自主事業　43 名
６／１９　地下壕見学会　神奈川県立大師高校 1 年生・先生 18 名
６／２０　運営委員会（日吉地区センター）

予　定

６／２９　会報１０６号発送（日吉地区センター）

☆定例見学会　　７／２８（土）１３時〔締め切りました〕・９／２９(土)・１０月未定
☆夏休み見学会　　８／２（木）１０時・８／６(月)１３時・８／１１（土）１３時
☆地下壕見学会は予約申込が必要です。
お問い合わせは見学会窓口まで　℡045-562-0443（喜田　午前・夜間）

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15　℡ 045-561-2758
(見学会・その他) 喜田美登里 : 横浜市港北区下田町 2-1-33　℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/

日吉台地下壕保存の会会報　　（年会費）一口千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表　大西章　　（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会